

夜<sup>よ</sup>刑<sup>けい</sup>事<sup>じ</sup>

装画：雪下まゆ 装丁：bookwall

セットしておいたアラームが鳴る前に目が覚めた。十分眠ったからではない。予感が目覚めさせたのだ。

昔は予感なんて、自分のものだろうと他人のものだろうと信じたことはなかった。今は、自分の予感だけは信じている。

携帯が振動した。予感が当たった。

前川課長からだった。

「はい」

耳にあて時計を見た。午後四時十八分。アラームは四時半にセットしてある。

「起きていたか？」

「ええ」

たった今、とはいわずにおいた。

「十七時に迎えがいく」

課長はいった。

「迎え？」

「暴対の岩井と松谷だ。上野を見たがっている」

俺は黙った。俺の所属は、警視庁組織犯罪対策部国際犯罪対策課だ。三年前に移ってきた。それまでは公安部公安総務課に所属していた。

感染し、半年の療養期間を経て組対部に異動になった。通常の業務に耐えられないと診断された俺には、退職するか異動をうけられるかの二択しかなかった。

昼間の勤務が不可能な体になり、俺は退職するしかないときらめていた。その俺を、この課長が拾ったのだ。

感染した犯罪者の対応には、感染した警察官が必要になる。そう考えたのだという。

俺に是非はなかった。生きていくため、俺を感染させた明林を捜すため、俺は異動にしたがつた。

「二人ともマル暴のベテランだ」

課長がつけ加えた。俺が心配していると思ったのだろう。

「知っています」

岩井は暴力団対策課の班長で、柔道四段の猛者だ。松谷は大学ラグビーの元フォワードで冷蔵庫のような体つきをしている。

「上野にいくのは嫌か」

「嫌なわけではありませんが、二人は入った経験があるのですか」

「手前まではあるらしい。奥はないと聞いていた。それで君に案内を頼んできた」

「わかりました」

俺は答えた。

「無理はしなくていい。奥がどうなっているのか知っているのは、君だけだ」

「はい」

「着いたら君の携帯に連絡がいく」

告げて、課長は電話を切った。

ベッドをでた俺は身支度を整えた。ゼリートタイプの栄養補給剤を冷蔵庫からだし、飲む。

感染してから食に興味がなくなった。味に敏感になりすぎ、素材や調味料、料理したキッチン匂いまでも感じてしまう。つまり何を食べているのか、わからなくなる。何を食べても、味の濃さに吐きけを覚えるようになった。

皮ジャケットの下に、支給品のシグ230を腰に留めた。特殊警棒も装備すると、それなりの重さになるが、上野に丸腰ではいきたくない。まして俺は感染者だ。感染者の犯罪者にとって感染者のデコスケは、いの一歩にぶち殺したい存在だ。

岩井と松谷の二人も武装してくることを俺は願った。ベテランのマル暴の中には、丸腰で極道に立ち向かうのを信条としている者がいる。

確かに警察官に銃や刃物向けの極道はそういない。向ければ、自分だけでなく組全体に累を及ぼす。

が、急速に外国人との混合が進んだ最近の犯罪組織はちがう。日本でデコスケのひとりふた

りを殺しても、逃げる国はいくらでもあるし、拾ってくれる組織も多い。暴排条例で食いつめた極道が、今では世界中に散り、その土地土地で、日本で培った知識や技術を役立てている。極道といえど低学歴で外国語が苦手だというのも昔の話で、英語はもちろん、中国語、ロシア語、ベルシャ語を操る極道すらいる時代だ。

かつては、日本の極道は外国では生きていけないとされていた。だから警察に逆らわず、手配されれば出頭して、懲役を果たした。

丸腰を信条にするマル暴刑事は、そういった過去のイメージから抜けでていない。

中国語を話せた俺は、公安部時代、中国に何度も渡航し、とんでもない辺境地域にまで日本の極道がいるのを目にした。

極道が国際化したのは、まぎれもなく日本の法令のせいだ。日本国内で生活する最低の権利さえ奪われた極道は、海外にでる他なかった。

それは感染を広げるきっかけにもなった。

携帯が鳴った。登録のない番号からだ。

「はい」

「岩井という。この番号を前川さんから教わった」

太い声が告げた。

「岬田です」

俺は名乗った。

「あなたのマンションの前に車を止めている。仕度ができたら降りてきてくれ」

岩井はいった。

「了解です」

答えたが、俺は降りてはいかない。上がるだけだ。

部屋をでて階段を上がった。ひとつ上の階は地下二階で、マンションのトランクルームになっている。五十階だでのタワーマンションには約二千戸が入っている。その二千戸ぶんのトランクルームが地下二階にはある。

地下一階と一階の一部が駐車場だ。地下三階には専用階段でしか下りられない。

専用階段の扉を俺は開いた。トランクルームの最奥部にある、この扉のカードキーをもつのはこのマンションの管理会社の従業員と俺だけだ。

地下三階には機械室と俺の部屋がある。もとは管理員の休憩所として作られたらしいが、陰気だという理由で使われなくなり、日光がまったく入らない住居を捜していた俺に提供されることになった。警視庁警備部のOBが、管理会社に何人も天下りしていたことが幸いした。

専用階段の扉は、並んでいるトランクルームの扉と同じ色に塗られているので、そこからでてくるのを上の住人に見られても、トランクルームを使っていたと思われるだけだ。

地下二階からはエレベータで一階に上がる。

マンションのエントランスホールの前には広い車寄せがあり、その向こうは隅田川だ。

岩井の車はすぐにわかった。高級車に乗る住人が多いマンションの車寄せにあって、グレイの地味な国産車はかえって目立つ。

運転席には窮屈そうに大男がすわっていて、助手席の坊主頭が俺に気づくと小さく頷いた。日がすっかり暮れていることを確かめ、俺はエントランスホールから進みでた。十二月初めのこの時期、東京の日没は十六時三十分前後だ。

感染してからは、日の出と日の入りの時刻を毎日確かめる習慣が身についた。紫外線アレルギーは命にまではかかわらないが、顔や手など露出している肌にひどい火脹れを起す。

坊主頭が示した後部座席のドアを俺は開いた。

「岬田です」

「岩井だ」

坊主頭がいった。

「松谷だ。いいところ住んでんじゃねえか。何階なんだ？ 見晴らしはいいのか」

ハンドルに手をかけ、フロントガラス越しにマンションを見上げて大男がいった。

「地下三階です」

答えると、二人は俺をふりかえった。

「地下？」

あきれたように松谷が訊き返した。その目を見て、

「太陽の光が駄目なんで」

と俺は答えた。

「話では聞いたことがあるが、本当に駄目なのか」



岩井が訊ねた。

「アレルギーを起こします。それと直射日光の下では視力を失います」

俺は答えた。ホワイトアウトのような状態になり、ほとんど見えなくなる。

「そりゃ大変だ。公安ハムにいたって聞いたが？」

松谷が訊ねた。

「公安総務にいました。それより——」

俺は話題をかえた。

「拳銃は着装しておられますか」

「俺はもってきた。班長は——」

答えて松谷は岩井を見た。

「特殊警棒だけだ。今日は店の中を案内してもらえればそれでいい。トラブルになる可能性でもあるのか」

「手前側の店は問題ありません。が、奥に入るとなると、トラブルしかありません」

俺は答えた。

「トラブルしかない？ どういう意味だ」

「上野の店は、手前と奥のふたつに分かれています。手前側が『トコヨ常夜』、常に夜という名のバーです」

「『トコヨ』はちらつと入ったことがある。多少問題のありそうな客もいたが、たいしたこと  
はなかった。いきたいのは、その奥にあるという、会員制の店だ」

岩井はいった。

「奥の店は『常闇』。名前のとおり、まっ暗です。従業員も客も、感染者が大半です」

「そこを見たい。我々が捜しているのは増山圭三。藤和連合に所属していたマルBで、三カ月ほど前に感染した。増山は、藤和連合の金庫番のボディガードだったが、感染を理由に組を破門になった。増山をおさえれば、藤和連合の金の流れを解明できるかもしれん」

「その増山が『トコヤミ』に出入りしているという情報があった」

松谷がいった。

「感染したての人間は、先の生活に不安を感じます。これからどう生きてらいいのか、助言をくれるのは感染者だけです」

俺が答えると、二人はわずかの間、黙った。

やがて、

「あんたもそうだったのか」

松谷が訊ねた。

「そうです。私が感染した当時は、まだ日本に感染者は少なく、症状を知る医者すらいませんでした。研究している医療機関が中国にはあるということですが、そこで治ったという話は聞いていません。そうした情報を求めて、私が『トコヤミ』に通ったのは、今から三年半前です」

「警察官だという身分は隠したのか」

訊ねた岩井に頷いた。

「隠しました。『トコヤミ』の客は大半が感染者で、多かれ少なかれ犯罪にかかわっている人間ばかりですから」

「最初は中国ででたって聞いたが？」

松谷がいった。

「ベトナムやタイという説もあり、本当のところはわかりません。ただゴールドエンジェルに本拠をおく麻薬組織の構成員に感染者が生じたせいで、取引のある犯罪者に広がりました。日本にもその流れで入ってきました」

「あんたは中国でもらったのか」

「日本です。注射で感染しました」

「注射？」

「ウイルスを注射されたんです」

松谷は身じろぎした。

「感染力は低い、と聞いたぞ」

「飛沫感染はしません。血液や唾液などの体液が直接血管に入らない限り、ウイルスは生きられないので」

「自分の血を塗ったヤツパで切りつけるって話があるが」

俺は首をふった。

「出血した直後ならともかく、あらかじめ塗っておいた血液ではウイルスは死滅しています」

「女の感染者はいないってのは本当か」

訊き始めたら好奇心がおさえられなくなったようだ。俺は答えてやることにした。

「少ないのは事実ですが、いないわけではありません。通常の性行為では感染しませんが、まれにうつることもあるようです」

「血を吸うわけじゃないのだから」

俺は笑った。そんな噂をマル暴のベテランが口にするとはお笑いだ。

「血なんか吸いませんよ。ただ視覚や聴覚に加え、味覚や嗅覚が過敏になるので、ふつうに売られている食べものだと、味を濃く感じすぎてうけつけなくなるんです」

血を吸うという噂がたつた理由はわかっている。病原体が「ヴァンパイアウイルス」と命名されたからだ。そう命名された理由は、感染すると厳しい紫外線アレルギーを発症するところからきている。

命名したのはタイの学者だという。

「じゃ、何を食べて生きているんだ」

岩井が訊いた。

「ゼリータイプの栄養補給剤です。それも無味無臭のものです。化学調味料や合成甘味料が入っているものは、吐きけをもよおすので」

「すると飲むのは水だけか」

俺は頷いた。

「酒はどうなんだ？」

「混ぜもののないウイスキーや焼酎は飲めます。ワインは酸化防止剤がアウトです。酸化防止

剤が無添加のシヤンペンは大丈夫ですが」

「高くつくな」

「『トコヤミ』では、主にシヤンペンが飲まれています」

「感染者じゃない客も『トコヤミ』にはいるのか？」

「います。会員制とうたっていますが、感染者が連れてくれば、入ることはできますから。ただ中はまっ暗です」

「まっ暗？」

「体育館にロウソク一本といたってどの明るさです。感染者にはそれで十分ですから」

二人のマル暴は顔を見合わせた。

「それで増山がわかりますかね」

松谷がいった。

「増山の写真はありますか」

俺は訊ねた。岩井が携帯をとりだし、操作すると画面を俺に向けた。

細面ほこまへで眉が薄く、見るからに危なそうな顔つきをしている。髪の毛の生え際が深くV字に剃りこまれていた。

「去年の写真だ。今はかわっているかもしれない」

「いれば、私が見分けます。ただこのメンツでいくと、すぐに警察官だとバレるでしょう」

「バレたらどうなる？」

「その場の客にどんな奴がいるかでしょうね。この増山は、追われているのを自覚して

いるのですか」

「逮捕状はでていない」

「すると任意同行ですか」

二人は黙った。何かカラクリがあるようだ。

「増山に協力させる材料があるんですね」

俺はいった。それには答えず、

「とにかく『トコヤミ』に案内してくれ」

岩井はいった。

## 2

表の看板は「BAR TOKOYO」。その下に漢字で「常夜」と書かれている。上野といっても飲み屋街のある上野二丁目や湯島の界隈ではなく、池之端の東大附属病院の敷地とほぼ背中合わせの一角にある。かつては老舗の中国料理店だった建物を改装して作られたのだ。

台東区と文京区の区境に面していて、上野署と本富士署の管轄区域の境目にもあたる。「トコヤミ」の床下には、東大附属病院とつながる地下通路があるらしい。それは店のオーナーが東大附属病院の医者だという噂から生まれた伝説だ。

実際、「トコヨ」「トコヤミ」を作ったのは、常炳徳という、東大附属病院にいた中国人の

医師だった。医師でもあるが、商才にも長けていて、店の名に自分の姓を使った。

なぜ俺が知っているかというと、常の治療をうけていたからだ。情報を求め「トコヤミ」に通った俺は常と知り合い、その助言を得ることができた。常は上海の出身で、すでに中国で広がり始めていたヴァンパイアウイルスの感染者を診察した経験があった。

「常先生がいなかったら、もっと苦労したと思います」

上野に向かう道すがら、俺は二人に説明した。

「恩人でわけだな。その先生には、今もかかっているのか」

岩井は訊ねた。

「二年ほど前に亡くなりました。自殺、ということになっています」

俺は答えた。

「自殺？ なぜだ」

「理由は不明です。住んでいた小石川のマンションで、致死量の筋弛緩剤を注射した死体が発見されました。遺書はなく、事件の可能性も疑われる状況でしたが、大塚署は自殺と断定しました。その後、店の権利は別の中国人経営者に渡りました」

岩井がふりかえり、俺を見た。

「その経営者を調べたか？」

「李錫竜と名乗っている、五十四歳の感染者です。本名かどうかはわからず、その名前での犯罪歴はありません。常先生が亡くなってから、私は『トコヤミ』には行っていません」

「なるほど」

松谷が店に近いコインパーキングを見つけ、車を止めた。

「私の仕事を知っていたのは常先生だけでした。ですがこの三人でいけば、『トコヤミ』にいる連中には正体を気づかれると思います」

車を降り、歩きだすと俺はいった。

「増山を確認したら店をでる。外で増山を待ち、同行を求める」

岩井がいった。

「抵抗したら？」

「俺たちに任せろ」

「了解です」

「トコヨ」の入口は、一見アイリッシュパブ風で、格子ガラスから店内が見える。入って左手のカウンターには十の椅子があり、右手には八のテーブル席があつて、ざつと五十人がすわれる勘定だ。加えて、立ち呑み用の樽もおかれていて、混む日にはもっと多くの客が入る。

時間が早いこともあり、「トコヨ」は空いていた。カウンターには、最近増えてきたミャンマー人の娼婦がかたまつてすわっている。「トコヨ」のバーテンダーに日本人はいない。中国人とベトナム人だ。

客も大半は外国人だった。バーなのに、ハラルフードを扱っているので、パキスタン人やイラン人の客もいる。日本人はせいぜい二割というところだ。

「まずここで一杯やってから、奥に移動します」

俺は二人に告げた。日本人三人がいきなり奥に入ろうとすれば怪しまれる。



「わかった」

岩井はいつて、奥に近いテーブル席を選んだ。カウンターにすわっていた超ミニスカートの女が寄ってきた。きつい香水が匂った。

「何、飲みますか」

カタコトの日本語で訊ねた。

「ビール」

岩井が答えた。

「俺もビールを」

いつて松谷が俺を見た。

「スコッチのストレート」

答えると、女が微笑んだ。

「あなた、強いね。ワタシも一杯もらっていいですか」

腕にびっしりとタトゥーが入っている。松谷が見入った。女は作り笑いを浮かべた。

「恥ずかしいよ。あまり見ないで」

「ビールを奢る。だが、仕事の話をするから、向こうで飲んでくれ」

俺はいつた。

「オッケイ。わたしと話したくなったら、声かけて」

女が遠ざかると、

「ウエイトレスなのか」

松谷が小声で訊ねた。

「いえ。客になるか探りを入れてきたのだと思います。お巡りかどうかも」

「バレたか」

「微妙ですね。刈り込みだと思つたら逃げるでしょう」

女がビールとウイスキーのグラスを運んできた。

「わたし、ビールをあっちで飲む。友だちも飲んでいい？」

カウンターにはあと二人、女がすわっている。

俺は一万円札をだした。

「払った残りは使つていい」

女に渡した。女はにっこり笑つた。

「気前のいい人、好きよ。レシート、要る？」

俺は首をふつた。女の笑みが大きくなつた。

「わたし、ジャネ。覚えておいて」

女が遠ざかると、俺たちは乾杯した。ナッツを盛った皿を中国人のバーテンダーがテーブルに届けにきた。

「お客サンにお釣りもらったといっています」

目でカウンターを示し、いった。

「是」

俺はそうだと中国語で答えた。

バーテンダーは小さく頷き、離れていった。

「奥にはどうやっていくんだ？」

ナッツを口に入れ、岩井が訊ねた。

「トイレの奥の扉を抜けた先の通路に、メンバー専用の入口があります。俺が先にいきますから、二、三分待って追いかけて下さい」

俺はいつて、立ち上がった。

岩井は松谷を見やり、二人は頷いた。

「トコヤミ」には二年以上いってなかったが、「トコヨ」には二カ月ほど前にきている。明林を捜すためだ。

明林と俺は結婚を考えるほど惚れ合っていた。少なくとも俺はそう信じていた。

が、呉明林は、俺にヴァンパイアウイルスを注射し、姿を消した。中国に帰れない事情が明林にはある。まだ日本にいると考え、俺は明林を捜していた。

捜す理由は、なぜそんな真似をしたのかを知るためだ。俺と別れたかったのなら姿を消すだけですんだ。憎んでいたのなら殺せばよかった。チャンスはいくらでもあった筈だ。

男子トイレに入った。並んだ個室のつきあたり「PRIVATE」と書かれた扉がある。

トイレを使っている者がいないことを確認し、俺は腰からシグ230を抜いた。遊底ゆうていを引き薬室に初弾を装填して、安全装置をかけると腰に戻した。

「PRIVATE」と記された扉を押した。明りのない通路が右手にのびている。扉を閉めると、通路はまっ暗になった。

目が慣れるのを待った。瞳孔が広がり、あたりが見えるようになった。

個人差があるらしいが、感染者は暗闇でも視界を確保できる。同様に、遠く離れた物音を聞きとることも可能だ。ただし都会には常に騒音があるため、特定の音や会話だけを聞くには慣れが必要だ。

感染した当初は、どこにいても聞こえる車のエンジン音やエレベーターやエアコンの機械音、人の話し声に苦しめられた。

俺はあたりの匂いを嗅いだ。通路に人の姿はなく、気になる匂いもしない。血と火薬の匂いがするときには要注意だ。犯罪者が近くにいる。

通路のつきあたりに、分厚いステイルの扉があつて、そこが「トコヤミ」の入口だった。背後の、トイレとつながった扉が開いた。ビールの匂いをさせながら岩井と松谷が現われた。

「まっ暗だ」

「わっ、何も見えないぞ」

「静かに」

俺は小声でいった。松谷がのけぞった。

「そこにいたのか」

「扉を閉めて下さい」

「閉めたらまっ暗だ」

「ずっと開けたままだと警報が鳴ります」

「マジか」

松谷はいつて扉を閉めた。携帯をとりだし、あたりを照らす。

その光に俺は顔をそむけた。

「そいつを消して、俺のあとをついてきて下さい」

「いや、消しちゃったら、あんたがどこにいるのかもわからない」

「じゃあポケットにでも入れて。『トコヤミ』はこの先です」

「あんたには見えているのか」

岩井は低い声で訊ねた。

「この先にいるのは、見えている奴ばかりです」

「そうか。松谷——」

岩井がいうと、松谷は頷き、スラックスのポケットに携帯を入れた。洩れる光を頼りに、俺のあとをついてくる。

つきあたりの扉には、筆文字で黒く、「常闇」と書かれている。常先生の字だ。俺は扉を押した。

一ルクスあるかどうかという光に満たされた空間が広がっていた。常人にはものの輪郭が見てとれるかどうかの明るさでしかない。

中央に円形のカウンターがあり、中に二人のバーテンダーが立っている。そのカウンターを囲むように、間隔をあけてソファが配されていた。

カウンターには大きな銅製のアイスバケットがおかれ、シャンペンのボトルが何本か刺さっていた。

「いらつしやいませ」

バーテンダーのひとりがいい、俺は軽く手を上げた。客は五人いるだけだ。見知った顔はない。

「シャンペンでよろしいですか」

俺がカウンターに近づくとバーテンダーは訊ねた。わずかに中国訛なまりがある。

「三つ」

俺はいった。バーテンダーは、おそろおそろ近よってくる岩井と松谷を見ている。

「ビジターの方ですね」

「二人はそうだ」

俺は答えた。バーテンダーはアイスバケットに並んでいるボトルを示した。

「何にします？ モエ、クリュッグ、ローラン・ペリエ」

「モエでいい」

「白？」

俺は頷いた。ここでは一番安い飲物だ。

バーテンダーはグラスを並べ、シャンペンを注いだ。会計は「トコヨ」でまとめて払うシステムになっている。

「気をつけて」

バーテンダーが嘲あざわらるようにいった。手をのびた岩井がグラスを倒しそうになったのだ。俺はグラスをとり、二人に渡してやった。

「すわりましよう。あいている席に案内します」

ささやくようなボリウムでジャズが流れている。雰囲気作りというより、他の客の会話を聞きづらくするためだ。

俺は店全体が見渡せる位置のソファに二人を案内した。

「聞きしにまさるな。何も見えない」

岩井が小声でいった。

「こっちの会話は丸聞こえです。気をつけて」

二人をすわらせると、俺はささやいた。二人は緊張した顔になった。

「対象者はここにいるか？」

岩井が訊ねた。俺は首をふりかけ、二人に見えない可能性も考えて、

「いません」

と答えた。

ひと組の客はカップルで、男が隣にすわる女の体をまさぐっている。女は周囲には見えていないと信じているのか、下着を膝近くまでおろし、息を喘あえがせていた。

あとのひと組は三人で、顔をつきあわせながら、ほそほそとベトナム語で喋っていた。

岩井と松谷はずっとシャンペングラスを手にしていた。ソファの前にテーブルがあるが、グラスをおくと、どこにおいたのかわからなくなるのだろう。

「俺がとりにいきますからお代わりをして下さい。一杯で粘ると怪しまれます」

俺は小声でいった。岩井と松谷は息を吐き、シャンペンを空けた。三つの空のグラスを手を、

俺はカウンターに近づいた。

「お代わりを」

俺は最初に酒を注いだのではないバーテンダーに告げた。

「かしこまりました」

バーテンダーは頷き、モエのボトルをとりあげた。こちらは日本人のようだ。

扉が開いた。男がひとり入ってきた。耳全体をおおうヘッドホンとサングラスをつけている。

新米の感染者だ。感染したばかりだと、日常の騒音に耳が慣れるまで半年近くかかる。その間は、家の中においてもノイズキャンセル機能のあるヘッドホンを手放せない。

男は店の中を見回すと、まっすぐ俺のかたわらにきた。ヘッドホンとサングラスを外し、バーテンダーをにらむ。目の下の隈と薄い眉があらわになった。写真よりさらに剣呑さが増している。

「李さんはいつくる？」

「社長がみえるのは八時過ぎですね」

バーテンダーは男を恐れるようすもなく答えた。

「八時い」

いつて男は腕時計を見た。舌打ちする。俺は男の服装を観察した。ノーネクタイでスーツを着ているが、ジャケットのサイズが大きい。

これも新米感染者の特徴だ。今まで食べていたものを受けつけられなくなり、大きく体重を落とす。それで死ぬ者もいる。



「李さんと連絡がとれるか？」

バーテンダーは無言で首をふった。俺はシャンペンが満たされたグラスを二つ手にして、岩井たちのところに戻った。三つ運ばなかったのは、もう一度カウンターに戻るためだ。

「きました」

グラスを二人に手渡しながら俺はいった。

「どこに？」

「今はカウンターの前にいてバーテンと話しています」

松谷が腰を浮かせた。カウンターの方角に目をこらしていたが、

「駄目だ。見えない」

とつぶやいた。

「『トコヨ』にいて下さい」

俺がいうと、岩井は頷いた。

「わかった」

俺はカウンターに戻った。自分のグラスを手にとる。

岩井と松谷がへっぴり腰で「トコヤミ」をでていくのをバーテンダーが目で追った。

「お連れさまはお帰りですか」

「ああ。好奇心できてみたが、何も見えないのでつまらないとさ」

俺はいつてシャンペンをひと口飲んだ。

「お代はお客さまでよろしいですか」

「俺が払う」

増山が俺を見た。

「感染したてで苦労してるだろう」

俺はいった。

「なんだと」

増山がいった。俺は肩をすくめた。

「初めは皆、同じ苦労をする。うるさくて眠れない。食いものを受けつけない。顔や手は火傷だらけになる」

増山は俺を見つめた。

「あなたのいう通りだよ。たいがいのことには驚かない生きかたをしてきたが、こいつには参った」

「じたばたしても始まらない。慣れれば不便ばかりでもないぞ」

俺はいった。お互い感染する前だったら、決して口をきくことはなかったろう。増山はひと目で俺を刑事だと見抜き、近づかなかった筈だ。

感染したことで増山の世界はかわった。極道かカタギかで線引きしていた人間関係が、感染者かそうでないかになったのだ。

「あんた、長いのか」

「じき四年だ」

バーテンダーがほうという顔で俺を見直した。